

NAKED EYES

BY KOUICHIRO GOSHO

NOT JUST DANCE

井上千子

■プロフィール 1956年11月28日京都生まれ。ノートルダム女子高卒業。祖母は京舞井上流四世家元、人間国宝の井上八千代さん。3歳の時から舞を始め、12歳で名取りに。芸術選奨文部大臣新人賞・花柳寿応賞等を受賞の日本舞踊家。本名・観世三千子。



あるがまま、おるがままにて
美しい。舞の王女は生粹の京女

妻、母、職業人、そして女—
4つの顔があると、女優さんの評価によく言われるが、井上千子さんは舞だけでもふたつの顔をもつ。伝統の井上流・京舞を伝える芸術家としての顔と、祇園の舞妓さんや芸妓さんたちに教えるお師匠はんとしての顔。かつて歌人の吉井勇氏に「かに

火事で運の向いてきた

井上流

御所 京都と冠すれば何でも売れる、と京ブランドがはびこる時代ですが、井上流だけが正真正銘の京舞なんですね。

井上 誰が言い出した言葉かわからんですけど、届けも出してます(笑)。同じ会でも国立劇場で演るときは「井上流と書かずに京舞と書いてくれ」と言われます。

御所 「京」の一字の神秘性はまだまだ健在ですね。井上流の歴史を教えてくださいませんか。

井上 初代の八千代は江戸中期に御所づとめをしてた、言うたら「嫁き遅れ」で、御殿舞を基に流派を起こしました。文楽や能の要素を持ち込んだ二代目は、この人の姪です。火出しがきついで法度の時代に、井上の家は火事の度に運が向いたよう

かくに祇園は恋し 寝るときも枕の下を水の流る」と歌われた、紅灯の巷の代名詞。ここから、井上流は世界に発信している。そうだ、祇園へ行こう。近頃色気なしのネイキッドに色香を添えてもらおう、と勇んで花見小路の女子芸技芸学校を兼ねるご自宅にお邪魔した。

なんです。最初の宿替えて鳥原のお師匠さんになり、大火で祇園まち全体が島原へ移転してきた縁から、祇園で舞を教え始めました。三代目は百まで生きた「都をどり」の創始者。祖母で四代目になります。

御所 最初から決まった型を伝えてきたわけじゃなく、それぞれの時代のなかで生きた結果が形として残ったんですね。

井上 振り伝えられても実際に舞うのは生身の人間です、いつも生もののが舞の魅力でしょうね。本来舞は内へ内へと籠もってゆくもので、「宇宙の中の、ここに人間がいます」というのが見せられたらいい。理屈っぽい言い方ですけど、感性豊かな若い人に見ていただける舞を、と心にかけています。私自身、20代の多感な頃に70代の祖



母がひたむきに舞う姿を見て、大いに刺激を感じて励まされた覚えがあります。御所 それで若い世代向けに、「ご自宅で「澤の会」を催されてるんですね。年4回の稽古で、1回7000円ですか。井上 よう調べてくれたはる(笑)。最初は3000円でお茶も出してました。従来の会は新しいお客様を受け入れにくくて……御所 敷居が高い。よく言われる京都人気質ですね。

「何もこしらえてへん人」と言われるのがいちばん困る

御所 建都1200年の機会に、新しい試みをされるのは？ シチュエーションのまったく違う場所で同じ演目をされるとか。井上 今年やからやる意義のあることを……と考えてます。後世の人に「あの人だけは、何もこしらえてはへんかった」と言われるのは困りますし。御所 戦後50年の京都って、その通りの状況やっただと思われませんか？井上 能でも(注…ご主人、父、叔父、弟等一家の男性陣は観世流能楽師)、蠟燭能の月は盛況なんです。蠟燭の灯りで見ると装束の色合いも変わる。何より、一段暗いと目を凝らすから、お客様はいつもより心を近づけて見られた気がする。簡単なことが大切だと思います。御所 趣向を凝らすのは邪道と思う人が、周囲にはまだ多いんじゃないですか？井上 こだわりがなくなるとやれないかもしれせんね。二代目が文楽の人形取りを取り入れた時も、異端とは言わずとも新鮮なことやったはず。祖母などは早くから大家のように言われますが、舞い尽くした演目でも初めて舞台上に立った人の

井上 とつつきが悪くて、人の中に踏み込まんのが京都の人間やと言われますが、井上流にも似通ったところはあります。御所 会をベースにした新しい展開は？井上 舞は、ひとりでは舞えへんものですか、地方の演奏や衣装、髪結いにいたる手仕事に興味のある人を掘り起こしたい。レバートリーも増やしたい。それに、やはり見る場の風通しをよくして、お客様の側にも、サラの目で見て頂きたい気持ちはあります。



よつ。ひとりの人間としての変化もありまして、60代までは強いタチ役だったのが、70代で女らしい艶物を演じ、80代では、あるがままの人間そのものがそこに在る境地に入りました。90歳の現在は、ふとした仕種がほんに可愛らしい。御所 まさに自然のあるがままの姿なんですよ。現代舞踊やダンス、エアロビクスは、井上さんの目にはどう映ってますか。

井上 ジャズダンスのように身体を動かす喜びを感じるのが、踊りの基本でしょうね。踊りと舞の違いは、水平な動き中心の舞が内側向かう力で、踊りは人間の爆発する力が外側へ向かうものと言われます。踊りの喜びは人間にとってごく自然なことで、舞にもその要素はあります。見せるものとしての現代舞踊は、精神を閉じ込めてゆくところが、やはり京舞にも通じると思います。御所 一心に内側を見て、一点に絞り込んでゆく。心を身体で表現する動きだからでしょうか。井上 そんなにかたいことはお稽古では言い

祇園の赤は、よそとはひと色ちがう赤

御所 京都の1200年は、こだわりすぎの歴史やったのかもしれない。

井上 何につけちよつとひっかかるのが京都人気質でしょうけど、みなで何か出来るはずですよ。舞が育ったのも、この土地だったからこそと思いたいし、祇園の赤はよそとはひと色違う。私自身、山紫水明の京都で舞い続けたい気が強いんですが、今の京都は中途半端な町になってしま……御所 ほんまに、もつと真剣にちゃんとやらなあんで！ と叫びたいですね。井上 御所さんは、たとえば祇園ではどこを残したいと思われてます？御所 綺麗な所や精神的な部分で感心することはいろいろあるんですが、「祇園」の響きほどに美しいものはない。言葉にふさわしくない

せんけど、「役になれ。そやけど、そればかり思い過ぎたら舞が小そうなる」と、祖母は言ったりします。閉じ込めるばかりでは自分だけのことで、解き放つ作業はひとつあるんでしょね。女が女を舞うわけですから、自然体が目標です。御所 自然に演る、というのはいちばん難しいことですよ。あせな、こうせな、とこだわりや気負いが混じるでしょう。井上 顔に力が入ったりしてしまいますね。「何かしようとしてる」が見えると、芸能として具合が悪いです。

状況やと思います。

井上 京都全体の問題でもありますがね。私、歌舞練場の青い瓦を見ると「帰ってきたわ」と感じますけど、あれも出来た頃は特異な建物やっただけでしょう。でも京都駅には、「いよいよ……」の感慨はひとつもあれへん。御所 いっそ本願寺から見えんぐらいにしてしまたええ(笑)。ゾーンやシンの考え方がないと、京都全体がただの観光地になってしまう。

井上 そこが怖いですがね。祇園まちも、600人の舞妓さんがおった時代に比べると寂しくなつてしまつたけど、不況のお蔭で皆さん緊張してはる。舞妓さんや芸妓さんの舞は私たちにはできないものだから、なくしてしまつたのは、ほんまに惜しいんです。



(御所氏へのメッセージ)

御所光一郎「クラフティ」プロデューサー。井上三千子氏より、

「気配りのお人ですね。私のわかりにくい話をよく考えながら引つ張ってください。お蔭で気楽にしゃべらせて頂きました。ぜひ、舞をいっぱいご覧ください。」